

〔東雅地輿〕倭名鈔に、説文を引て、瀬はせ、泉流於砂上也と注せり、又萬葉集抄に、瀬といふは淺くして、せせらき浪たつをいふなりとも見えたる、さらばせと云ひしほ塞の義にて、水の砂石のために塞がれて分れ流るゝ也、されば一瀬ともいひ、瀬々ともいひ、七瀬八瀬八十瀬なども云ひしナリ、古語にセトイヒシハセの義あり、されば塞の字讀てセキともいふが如きはみな語助なり、湍の字讀てセといひシハ其字の音によれるなり、倭名鈔に唐韻を引て、湍他端反、一音專讀てセトイヒシト見えたり。

〔倭訓栞前編十三〕せ瀬は、説文に水流砂上也とみゆ、略中古事記に、青人草之落苦瀬といへる辭見えたる、水淺くて舟かよひがたきに喻へて、神代よりかくはいへるにや、歌にこゝを瀬にせん、逢瀬、うき瀬、戀しき瀬、うれしき瀬などよみ、俗にやる瀬なし、瀬こし、瀬ほろばかしなどいふ是也といへり、湍を日本紀にせとも、たきともよめり、説文に疾瀬也と注す、新撰字鏡に瀧潤をはやきせとよみ、歌に山のたきつ瀬などいへる是なり、灘をなだと訓ずれど、増韻に瀬也と見え、新撰字鏡に、わたせとも、かはらげせともよみたり、七里灘を嚴陵瀬ともいふ事、大明二統志に出たり、古へはせとよみしにや、新古今集に貫之は曲水の宴せしに、月入花灘暗といふをよめる、坂上是則遺集に入て、それもまたせとよめり、題の句は白樂天が詩なり、

〔八雲御抄三上儀瀬〕あさせはやせくだりせのぼり瀬、びらせがみづせひとつせに浪立さらひ行水と云り万のちせ万かも河の後せ玄づけみといへり

〔八雲御抄五所瀬〕

やまぶきのせ山、宇治川也、ふる河の大源となせ山

〔古今和歌集十八〕題玄らず

世のなかは何かつねなるあすかばは昨日の淵ぞ今日は瀬になる